

正蓮寺報

令和八年三月一日
第二三八号

ご案内

春季彼岸会(永代経法要)

三月二十日(春分の日)

朝座 十時

昼座 一時半

法話 片岡妙晶 先生

まんのう町 慈泉寺

九時半 永代合葬墓法要

一時 永代経開闢法要

三時半 納骨堂法要

昼 お斎進上

碧空会の皆様による手打ちうどん



例年になく厳しい寒さが続いた冬でした。それでも彼岸の月、三月の声を聞くころになりますと、どこか春のぬくもりが感じられるようになります。春分の日には、春季彼岸会・永代経法要を勤めます。どうぞお誘い合わせのうえ、お参りください。

さて、寺のホームページ、そしてインスタグラムの運用を始めて、まもなく一年になります。皆さま、ご覧いただいておりますでしょうか。

ホームページは更新が遅れてしまうこともあり、内容もまだまだ十分とは言えません。少しずつ手を入れながら、より見やすく、親しみを感じていただけるものにしてまいりたいと思っています。

インスタグラムでは、法要や行事のご案内のほか、境内の四季の様子や、日々のささやかな出来事、その折々に感じたことなどを、写真や動画とともにお届けしております。日々の投稿は主に坊守が担当し、ときには龍谷大学在学中の後住も、ご本山の行事の様子などを伝えてくれます。何気ない日常の中の、ふと心があたたまる瞬間を、皆さまと分かち合えましたら嬉しく存じます。

ホームページもインスタグラムも、「これまであまりお寺にご縁のなかった方や、若い世代の皆さまにも、お寺を少しでも身近に感じていただけたら」との願いから始めたものです。気軽にのぞいていただき、画面を通してお寺の空気を感じていただけましたら幸いです。



お彼岸に寄せて

春分・秋分の日を中日とした前後三日間の一週間をお彼岸といいますが。この時期、先立たれた方を偲び、お墓参りに行かれる方も多いのではないのでしょうか。しかし、もともと「彼岸」という言葉は季節を表す言葉ではありませんでした。

仏教という「彼岸」とは、古代インドの言葉であるサンスクリット語の「パーラミター」の漢訳「到彼岸」を略したもので、文字通り、向こう岸、つまり仏のさとりの世界を意味します。それに対して、私たちが日々生きているこの世界を「此岸(しがん)」といいます。

阿弥陀仏のはたらきによって、苦しみや迷いに満ちた世界である「此岸」から、さとりの世界である「彼岸」に到らせていただくと言くのが浄土真宗です。

親鸞聖人の詠まれた和讃(阿弥陀仏の教えや功德を、分かりやすい日本語で讃えた七五調の歌)の一つに

生死の苦海ほとりなし

ひさしくしづめるわれらをば

弥陀弘誓のふねのみぞ

のせてかならずわたしける

とあります。「苦しみに満ちた迷いの海はどこまでも果てなく続いている。その海に長い間沈んでいる私たちを、阿弥陀仏の本願の船だけが、必ず乗せて向こう岸、つまり、浄土に渡してください」という意味です。

自分の力で迷いを離れ、さとりの世界に到ることができるとあれば苦勞はありません。しかし、この和讃に「弥陀弘誓のふねのみぞ」とあるように、苦しみに満ちた迷いの海を私たちは自ら泳ぎきることのできない存在です。

このお彼岸は亡き方を偲びつつ、阿弥陀仏の「必ず向こう岸へ渡そう」との呼びかけに耳を傾け、自らの生き方を見つめ直してみませんか。